

# 紺青の海の果てに

艦隊の空母が戦局の行方を握った太平洋戦争。

海にも多くの兵士が駆り出され、烈しい戦闘が繰り広げられた。

現在も世界をつなぐ太平洋の青い海には、艦と共に沈んでいった数多くの命が眠っている…。

## 真実を忘れないでー ミッドウェー海戦から

亀山市 吉田 兼蔵

戦争体験者が毎年居なくなっていく中、私は八十三歳になって、やっと気づいたことがあります。

私は、昭和十五（一九四〇）年、十七歳で志願して横須賀海兵団に入団し、十九歳で零戦（零式艦上戦闘機）の整備兵として航空母艦「蒼龍」に乗り組み、ミッドウェー海戦に参加しました。呉を昭和十七年五月二十五日に出港し、攻撃が十七年六月五日でした。丁度開戦から半年です、ご承知のように大敗でした。

航空母艦赤城、加賀、飛龍、蒼龍の四隻が撃沈され、そのほかにも沈没した艦があったようです。

一兵卒の私には詳しい事はわかりませんが、その当時の日本海軍の主力艦隊が

ミッドウェーの攻撃に参加したように思っています。

私たちは攻撃の前夜、恩賜の酒で別れの盃を交わし、清潔な下着にし、夜明けと共に一斉に起床して、攻撃に向かう飛行機を送り出しました。

その直後でした、アメリカの雷撃機が蒼龍の左側から水面すれすれを直進し避けられない距離ぐらいいまで接近してから魚雷を発射し、蒼龍の前方すれすれの所を右に急旋回して帰路につこうとしました。蒼龍の甲板で待機していた零戦三機が緊急発進しましたが、すぐ目の前で一機が撃墜され水煙を上げました。シヨックでした。

アメリカの勇敢さにびっくりし、大和

魂は米英に絶対負けないと教えられ、信じていた私にとって頭が真っ白になり、何が何だか判らなくなり、一瞬夢でも見ているようでした。

船は右に急旋回、かろうじて魚雷を避けました。米機は二機の零戦に追われながら水平線に消えて行きました。間もなく零戦が帰ってきて米機を撃墜したとのことでした。ほっとしたのも束の間、上空の雲の間からチラッと飛行機が見え隠れしたかと思ったら、ヒュッヒュッと蛇行しながら全速力で進んでいる艦のすぐそばで大きな水煙が上がり、もうそれから一瞬で空母を集中的に蜂の巣をつついたように攻撃し、爆弾の雨でした。他の空母も同じような攻撃を受けていたと

思います。

魚雷を避けるため蛇行していて、攻撃から帰ってきた飛行機が着艦できず、やっとすきを見て一機着艦しましたが搭乗員が負傷していて、他の者が手助けして降りているのが見えました。

その時上官の怒鳴る声が「吉田何しとる、早く飯食って来い」私は急いで格納庫に降り握り飯をほおぼり、走って飛行甲板に駆け上がりました。その瞬間、急降下爆撃機の爆弾が目の前に命中し、格納庫あたりで炸裂したらしく爆風に飛ばされ、その後の記憶はありません。

どれ程の時間が過ぎたのか、身体が焼けて熱いので気が付き、慌てて服の火をもみ消しあたりを見ましたが人は一人も居ませんでした。急いで艦橋の下へ降りました、そこにパイロット二人と同僚の渡辺君が居ました。パイロットは顔から血を流し、胸のジャケットから煙が出ていました。渡辺君は無傷のようでした。四人は暫く無言で立っていました。「死ぬ時はこれで一緒にやろう」パイロットがピストルを指差しながら私の方に向かって言い、私は黙ってうなずき、また暫く無言、誰からともなく歩き出しました。格納庫では爆弾を積んだ飛行機が連続爆発し、母艦が破裂するかと思うほどの激しい振動と、頭の上にある丸窓からゴーゴーと火が噴出し、爆発の度に目の前の海面に何かが飛んで水煙が上がリ、兵隊も飛ばされているようでした。艦の前部

に無傷の者が十人ばかり固まって避難していました。私はそこまでやっとたどり着き倒れたようです。身体の火傷が腫れて意識が朦朧（もうろう）とし、「水くれ水くれ」といわ言のように言い、「やたらだめだ」という声がかすかにきこえました。しばらくすると眠くて眠くて、誰かが私の頬をたたいて「眠るな眠るな」の声もかすかに聞こえていました。

その頃艦は停止し、爆発も収まり駆逐艦からのボートに助けられ、狭い部屋にころころと寝かせられました。もう夕方でした。「蒼龍が沈むぞ、動ける者は甲板に出ろ」上の方から蒼龍の生き残りの者らしい声が聞こえました。それから内地に入港するまで、狭い部屋の中で次々に死んでいく中で私は生き残り、呉病院に入院しました。負傷者は皆秘密扱いで、外部との接触や看護婦さんとの会話も駄目でした。大本営発表の我が方の損害、敵に与えた戦果の偽りを隠すためでした。若しこの時真実を発表していたら、太平洋戦争は終結していたかも知れないと思いました。

あのミッドウェー海戦だけでも、隠さずに真実を発表していたら、その後南方の苦しい戦いでたくさん若い人が死に、玉砕、餓死、内地の空襲、東京、大阪、その他の都市で何万人もの人が亡くなる事はなかったかも知れません。また今の団塊の世代と言う現象も無かったかも知れない。ということに今八十三歳で

やっと気がつきました。

ミッドウェー海戦で、航空機の活躍が一番必要だということは、一兵卒の私にも骨身にしみてわかりました。でもその頃日本を動かしていた方々は、不沈艦大和とか、武蔵を造っていたのですね、今はテレビの時代になり、日本の国を動かしている政治家の方々のご意見も茶の間で聞くことが出来ます。ちょっと首をかしげたくなるような事が時々あります。どうぞ真実を忘れず、日本の将来の為、ご活躍いただきたいと思えます。

毎日のニュースを聞いたり新聞を見ておりますと、隠蔽、粉飾決算、知事さんや建築士さんの事など、みんな真実を忘れていのではないのでしょうか。一番重要な事を忘れ、無駄な不沈艦を造っていないでしょうか心配になります。

長々と書きましたが、今の若い方達に是非知っておいていただきたいと思いません。八十歳を越えてからではもう間に合いません。

#### 【編集部注】

ミッドウェー海戦は、中部太平洋ミッドウェー島攻略に向かった海軍機動部隊と、その企図を察知して待ち受けた米海軍機動部隊との海空戦。日本艦隊は、空母四隻、兵員三五〇〇、飛行機二〇〇余機を失って、致命的打撃を受け、太平洋戦争の転機となった。

# 父との別れ

松阪市 河合 忠雄

「昭和十九年九月十八日、比島ルソン島マニラに向け航行中、マニラ湾口（パタン半島ユリベレス西南三十里付近）に於いて、米潜水艦の雷撃を受け、午前十時四十八分『西貢丸』沈没と共に戦死任海軍中尉」

以上が父の顕彰額作成時に、厚生省に於いて調査した父の戦死の状況であります。

父が戦死したとき、私は十六歳でしたから、父の顔さえ知らない遺児の多い中では、長く一緒に過ごすことが出来たほうです。父は尋常高等小学校を卒業しましたが、子供の多い農家の次男坊でしたので、十七歳で海軍に志願し、昭和十（一九三五）年に十七年勤めた海軍を除隊するまで、海軍勤務が長くて、子どもの時の父との記憶はほとんどありません。

私が小学校入学後の六年間と、旧制中学一年の間でも、途中二年近く支那事変（日中戦争）に従軍していましたので、楽しかった思い出は残っていません。しかし、今心の中に残っている思い出は、私が中学一年の昭和十六（一九四一）年十二月十日に、再び召集を受け出征し、昭和十九年の四月頃であったと思われるのですが、ひよっこり休暇で数日帰郷したあと、呉に朝の一番列車で帰るため、父を

相可口駅（今の多気駅）に送った時のことです。約四里の地道を、父の漕ぐ自転車の後ろの荷台に、父にしがみついて乗った思い出。父は無口の人であったので、その時の会話も少なかったように記憶しています。後の記録によれば、父の任務は、輸送船「西貢丸」で比島に向けての弾薬輸送の任であり、それまでも二度、三度と往復していたようでした。最後に

出航した昭和十九年九月八日も、門司港より機雷七百個、爆雷二百個を積んで比島に向かったが、時すでに制海、制空権を米軍に支配されており、行けば必ず死ぬであろう最後の航海と覚悟していたから云うことが云えなかったのではなからうかと、今になって想像できます。

駅に着いて「兄弟仲良くして、しっかりと勉強し、お母さんを頼む」と云って、頭をなでてくれた父の心の中はどんなであったろうか。汽車が静かに駅を離れ、いつまでも身を乗り出して、手を振っていた父の姿は今でも儼然と消えることはありません。私自身はこれが父との最後の別れになるとは夢にも思っていなかったのです。

果たしてこの立場を今の自分に置き換えて考えてみると、幼い子ども達を残し、一〇〇パーセント生還することの出来ない別れが出来るでしょうか。

しかし、遺児の中でこんな最後の別れが出来た私はまだ幸福であったかもしれない。大半の遺児は、父の顔さえ知らないのですから。

私も兄弟を育ててくれた母も一昨

## 軍に徴用された運搬船の悲劇

——インタビュー

度会郡大紀町 西村 兼也

大紀町錦で海運業を営む西村兼也さんは十歳の時、父安吉さんをフィリピン方面の洋上で亡くした。安吉さんは、小さな運搬船安栄丸の船長だった。陸軍に徴用され、昭和二十年七月航空燃料を積んでマニラを出港し、ボルネオ方面に向かう途中撃沈され、乗り組んでいた七人が戦死した。詳細は一切不明という。自分のことより、運命を共にした乗組員の子どもたちの苦労を気にする戦後を送ったという。

—安栄丸の大きさは、どれ位だったんですか。

「総トン数六十五トンです」

—何を運んでたんでしょうか。徴用された経過を聞かせてください。

「雑貨です。当時、陸軍御用船という形で日本を出航して、向こうで徴用に入っていたらしいです。昭和十八（一九四三）年

年、父のもとに旅立ち、昨年旅立った弟と仲良く天国にいたことでしょう。このような悲しい父子の別れを二度と、これからの子ども達にさせない日本でありたいと願う今日この頃です。

六月に広島県の宇品を出航して、下関に入港して、そこで全船団が集結して出航したと聞いています。当時は四十隻程度と聞いておりましたけど。全国から集まったらしくて、錦からは、うちの船一隻です」

—最後に面会に行かれましたか。

「母に連れられて、下の弟と面会に行きました。紀伊長島から汽車に乗って下関まで行ったけど、何時間かかったか覚えがないなあ。呉の軍港を通過するときは、窓のブラインドを閉めさせられました。他の乗組員の家族も一緒に行きました。みんな錦の人です。一人だけ独身で若かったものです」

—そこから、どこに向かったんですか。「フィリピンのマニラ港へ入港したと聞いてます。現地では徴用されて、燃料とか、ロープとか、ゴム類を運んでおったと聞いています」



マニラで撮影した安栄丸乗組員の記念写真  
(前列右端が安吉さん)

「お父さんの最後になった航海ですが、いつ、どこから出港したんですか。」

「二十年七月二十八日、マニラを出港してボルネオに向けて、何か燃料を、ガソリンとか飛行機の燃料を積んでいたら、聞いてます。乗組員八人のうち一人が、現地で軍の命令で他の船に乗り換えさせられたらしい。最後の航海に乗ってなかったその方だけが帰還しました」

「どの辺で沈んだのか、それが飛行機の攻撃か、潜水艦だったのか、ご存知ですか。」

「何もわかりません」

「下船した方を除いて、乗っておられた七人の方が亡くなったんですね、お父さ

んの他に身内の方も…。遺体は帰りましたか、遺品類は…」

「父の弟の平介叔父も乗っていましたが、遺体は帰りません。遺品類は何にもない、全然ない。戦死の公報は紙切れ一枚、白木の箱だけ」

「お父さんは亡くなられた時、おいくつでしたか。」

「四十歳ですね」

「沈んだ船の補償はあったんですか。徴用の、借り上げ料金ってのは、陸軍から払われたんですか。」

「船の補償は全然ないと、聞いておりますけど。借り上げ料も無償で…」

「お父さんの記憶はありますか。撃沈されたって聞いた時に、どういうふうに思われましたか。」

「父の記憶はある。戦死の公報が来た時は、まだ、そう・・・死んだとは思わんだなあ、当時のことやけども」

「実感はなかったのですね。遺骨も何もないし…」

「何もなし、白木の箱一個やだな」

「兵隊でなくても、こういうふうな戦争に巻き込まれて戦死されたわけですが、ご本人は戦地へ行くつもりやなかったわけですね。」

「うん、当時はな。そうやな、まあ、お国の為やで、しょうないという気持ちでしょうね」

「戦後、いろんな苦勞をされたで

しょうね。」

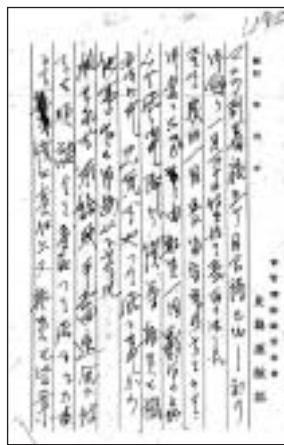
「苦勞っていうたら、苦勞ばかりやけどな。生きとつたら皆苦勞するやん。どうしても自分のことより、やっぱり、ここで皆一緒に亡くなった人（乗組員）の子どもと同じ年代やし、『おら、かわいそうにな』と…」

「お母さんは、ご苦勞なされたでしょうね。」

「十歳をかしらに五人の子どもを抱えて…、一番下がおなかの中にいるとき、父が外地に行った…、乳飲み子やったし、大変な苦勞だったと思う」

「昭和十九年十二月七日に東南海地震の大津波で、錦は死者六十四人という壊滅的な被害を出しましたが、その時は…」

「柱だけ残して家は流されました。一番下は生後八カ月の赤ん坊やった。食べ物がないと母親の乳は出ないし、避難先



で泣いてばかりいた。他の家族にやかましいだろうと気にして…、苦勞したでしょうね」

「船長より年上の人もいますね。五十歳近い、四十七歳ですか…。普通なら戦争に引つ張られる年齢じゃないですよな。」

「そうやなあ」

「戦争というものについては、どう思いますか。」

「二度と戦争はしていらんと思うなあ」

### 【安吉さんから届いた手紙】

マニラ到着後、五ヶ月間待ちわびし初のお便り、一月三十日付を以って受取りました。

さて、家内一同ただただ留守宅の方はお変わりなき由、船員一同かげながら喜んでおります。僕ら船員と相かわらず元気でやっておりますから、他事ながらご安心ください。承れば本給手当て送金につき、順調に受取っているとのこと。僕も責任上、船員と皆安氣しました。

先月付、お前の出産電報に接しました。時局がら、大いに祝福致したくとも、しかし一方考えれば、お前と子ども大勢にて全くつらいだろうが、僕の留守中を銃後婦人として大いにがんばってください。

なかんずく一月二十五日に偶然、甥の条一と面会しました。それから、一週間毎日のように遊んで居りました。

写真を撮りましたから、それを封入致しました。